豊かなシニアライフをデザインする

第３回

ニーズが見えたらチャレンジ!

社会参加は元気なうちから

サロンが発展すると、仲間内で役割づくりが芽生えてくる。始めは単なるお茶飲み会だったのだが、それだけでは物足りないと皆で家庭菜園にチャレンジして採れた野菜で食事会を行った。それが発展して栽培した野菜を中心としたバザーを開いて地域の人と交流した、というようなことがある。現在私どもが取り組んでいる多種多彩な「役割づくり」の活動を次に紹介しよう。まず、一番初めに取り組んだのは高齢者向け住宅の情報提供や入居希望者の相談に乗る事業である。札幌にどんどん高齢者向け住宅が増えてきた２００４年から取り組んでおり、現在は「あんしん住まいサッポロ」という組織となって、札幌市住宅管理公社の協力によりその一角に独立した相談コーナーを設けており、16名の相談員が平日の10時から16時まで2名体制で常駐している。

相談員は全員シニアのボランティアであるが、毎月の研修会や随時の見学会などを行い、質を高める努力をしている。昨年度の相談件数は1333件で、一昨年度までは右肩上がりだったが、３００件近く減少した。これは、サービス付き高齢者向け住宅がどんどん増えて供給過剰気味（札幌市は全国一の件数）となる中で、斡旋業者の相談窓口が急増したためであろう。私どもは、斡旋をせず市民目線に立った中立公正な相談を心がけている。

次に、２００７年より札幌市の委託を受けて「孤立死ゼロ推進センター」の運営を始めた。孤立死が話題となり始めた頃、孤立死を予防する取り組みをしようと札幌市に働きかけ、「さっぽろ孤立死ゼロ推進会議」を設置。その事務局をセンターとして運営したものである。モデル地区をつくり町内会や社会福祉協議会、地区組織と配達事業者などのネットワークを形成し、マンションや自治会などでの出前講座、啓発セミナーの開催などを行った（札幌市のHPに事業報告書がある）。配達事業者との全市的な連携もできた２０１３年度で委託を終えたが、その後は自主事業として「北海道孤立防止ネットワークセンター」を立ち上げ、団地サミット（集合住宅での孤立防止の取り組みをURや公営住宅の自治会に発表してもらい、先進的な例を学ぶシンポジウム）などを開催している。

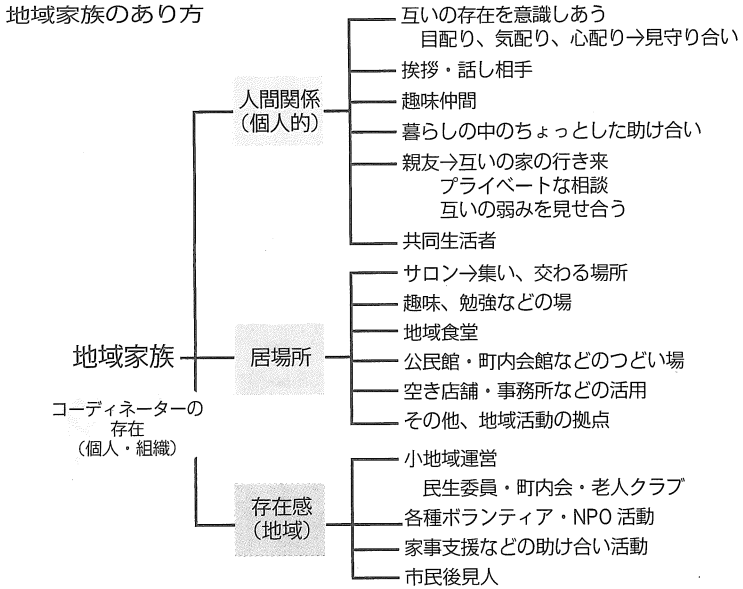
また、北海道社会福祉協議会の委託を受けて、中国・樺太帰国者支援にも取り組んでいる。残留孤児の一世の世代は後期高齢者となり、介護や生活支援の問題が出てきているが、日本語でのコミュニケーションの課題があり適切な支援を受けることが難しい。そこで、帰国者のための介護予防教室を月1回開いたり、年に数回作品展や発表会などを盛り込んだ集いなどを行っている。

「手応え」が継続の源

さて、このような活動をすると地域のニーズがいろいろと見えてくる。そこで関わっている誰かが「こうした取り組みが必要ではないか」と発案する。「ではやってみよう」とあまり後先考えずにチャレンジするのが、岩見太市前代表が培ったシーズネットの文化となっている。途中でこける事業も、もちろんある。

シーズネットは、「介護報酬」のような定量的な収入を期待できる活動は全く行っていないので運営は厳しい。ほとんどがボランティアであり人件費がかからないからなんとかマネジメントができている。それでも続けていけるのは、自分の活動が人の役に立っているという思いがあるからだろう。「社会貢献をしよう」というと大げさにとらえられ「私はそんな立派なことできません」とよく言われる。それよりもまずは「ちょっと手伝って」という感じで誘ってみる。その活動が地域のニーズにマッチしていたら必ず手応えがある。「ニーズが見えたらチャレンジ」する文化をこれからも育んでいきたい。

国は、今回の介護保険改正の方針に高齢者の社会参加を位置づけたが、それを促進してきたシーズネットの活動から言えることは「社会参加は元気なうちから」ということである。もともと社会との交流が乏しい方に、要介護状態になってから「参加」を働きかけても選択肢はどうしても限定的になってしまう。逆に、このような場に属していた方は、たとえ要介護状態になっても強く生きている人が多い。社会参加の中で培った友人知人の支えがあるからだろう。

この連載で述べてきた「仲間づくり・居場所づくり・役割づくり」の取り組みであるが、岩見前代表が「地域家族の時代」（２０１２・筒井書房）の中でまとめたイメージを参照された い（図）。（終わり）

（認定NPO法人シーズネット理事長・奥田龍人）